

## 第五節 糖業事情

太平洋戦争のぼつ発とともに、食糧増産対策が強くなり、ちだされたため、さとうきびの栽培は急速に衰退し、終戦の昭和二十年には鹿児島県全体で八百四十四ヘクタール、翌二十一年には七百六十三ヘクタールと激減した。しかし熊本地方は戦後の甘味源の窮乏から黒糖ブームを現出し、昭和二十五年には昭和初期の栽培面積にまで回復した。

いっぽう、奄美大島は終戦とともにアメリカ軍の管理下に入り、本土から隔絶されていたため、生産の回復はおくれていたが、昭和二十八年十二月二十五日の本土復帰によって奄美糖業の新しい時代が開けてきた。

太平洋戦争時代の和泊町におけるさとうきびの生産状況は次のとおりである。

年 年	期間	栽培農家戸数 戸	栽培面積 町歩	生糖量 t	操業状況	
					畜力(個人) 台	動力(共同)
15 ～ 16	昭和15年	一、五八五	三二二	一、一三〇	九〇一	一六
16 ～ 17	昭和16年	一、五七〇	三一九	一、四二四	八九五	一六
17 ～ 18	昭和17年	一、五五二	二九九	一、五九〇	九〇三	一六
18 ～ 19	昭和18年	一、五一四	二五六	七〇一	八七九	一三
19 ～ 20	昭和19年	一、三八二	一八四	九五	七九四	一六
20 ～ 21	昭和20年	一、二六五	五三	八五	八五四	一三

以上のように昭和十九年、二十年にかけては本土への出荷が難しくなり、生産量は急激に減少しヤミ販売や自家用程度であった。また販売ルートは終戦まではほとんど大島郡農業会を通じて本土に出荷していた。